2022 年度フィールドネット・ラウンジ企画

フィールドワークってなんだ？
—異分野方法論談議（霊長類学・言語学・歴史学・人類学）—
報告書

１．著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です
Copyrighted materials of the authors

２．研究会基本情報

開催日：　2023 年 1 月 9 日（月・祝）
場所：　オンライン開催（Zoom）
参加者人数：　72 名（登壇者も含む）
企画責任者：　谷口晴香（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
アドバイザー：　足立薫（京都産業大学）
ファシリテーター：　青井隼人（東京外国語大学）
共催：　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）
東京外国語大学フィールドサイエンスコモンズ（TUFiSCo）
科学研究費補助金基盤研究（S）「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」（研究代表者：河合香吏、課題番号：19H05591）
科学研究費補助金基盤研究（C）「ケニアの聾／聴者の相互行為態に関するヴィジュアル・メソッドを用いた民族誌的研究」（研究代表者：吉田優貴、課題番号：20K01189）

プログラム：
【挨拶】
13:00-13:05 フィールドネットからの挨拶 / 谷口晴香（AA 研）「趣旨説明」
【第一部】各分野のフィールドワークの紹介
＜霊長類学のフィールドワーク紹介＞
13:05-13:25

谷口晴香（AA 研）「積雪地のニホンザルのアカンボウはどのように冬を越すのだろうか？」

13:25-13:45

杉浦秀樹（京都大学野生動物研究センター）「ニホンザルの声のやりとりを野外で調査する」

＜言語学のフィールドワーク紹介＞

13:45-14:00

青井隼人（東京外国語大学）「彼らはどうやってその母音を発音しているのか：沖縄県宮古郡多良間村での器械音声学的調査」

14:00-14:15

古本真（AA 研）「とりあえず行ってから考える：ザンジバルでのスワヒリ語の方言調査」

＜歴史学のフィールドワーク紹介＞

14:20-14:40

守田まどか（AA 研）「イスタンブルで史料の海にとびこむ」

＜人類学のフィールドワーク紹介＞

14:40-15:00

吉田優貴（AA 研）「ケニアの聾者／聴者との民族誌的フィールドワーク〈私の場合〉」

【第二部】談議

15:10-16:00　質疑応答と談議

総括：

本ラウンジでは、四つの分野（霊長類学、言語学、歴史学、人類学）の研究者が各分野のフィールドワークを紹介した後、談議するなかで相互理解をすすめ、異分野協働の足掛かりをつくることを目指しました（企画趣旨の詳細は「3.1 企画趣旨」を参照してください）。

まず、研究者 6 名が各自の分野の「フィールドワーク」について以下の 3 つの要素を含め報告しました。(1) フィールドワークの方法紹介「なにを調べたいと思ってフィールド（現地）に行くのか」、「その目的のためにフィールドではどのような調査をするのか」、(2) 課題を発見する過程やフィールドでの気づきのエピソード、(3) 研究内容について他分野の知見を借りたい点、についてです（発表内容詳細は、「3.2 発表要旨」を参照してください）。

霊長類学のフィールドワーク紹介を谷口と杉浦が行いました。谷口は青森県下北半島（積雪地）のニホンザルのアカンボウの採食・伴食行動に着目した自身の研究を紹介しました。学部の卒業研究でニホンザルの下顎形態の研究をした際に、実際に生きたサルを観察したいという思いからフィールド調査を行うようになったという経緯を説明後、自身が行ったフィールドワーク調査について当時の日記なども用い、徐々に課題を発見していった過程を示しました。杉浦はニホンザルの音声コミュニケーション、特に「クーコール」に対する

応答や「クーコール」の意味（状況と声の特徴に対応があるか）について、自身の研究を紹介しました。さらに、実験室、動物園（放飼場）、野生という 3 つのフィールドを比較し、音声研究を行う上で、野生では、サルの発声頻度が高く、仲間との距離（遠近）にバリエーションが生じやすく、個体レベルのデータが取得しやすいといった利点があることを自身の研究事例を用い指摘しました。

次に言語学のフィールドワーク紹介を青井と古本が行いました。青井は、沖縄県宮古郡の多良間村の音声学的な特徴、主に多良間方言の「第 6 の母音」の発音に関する研究について紹介しました。どのように調音しているかを明らかにするのは聞きとりのみでは難しく、静的パラトグラフィー調査（口蓋もしくは舌に墨を塗る調査）を用い可視化し、そこから舌の動きを推測するとのことでした。テキスト化をしない調査方法で新鮮でした。古本は、タンザニア連合共和国のザンジバルにおけるスワヒリ語の方言研究について紹介しました。言語調査の際には、調査票を用いた「聞き出し」の手法が頻繁に用いられます。この「聞き出し」調査の手法は、仮説検証型のようなイメージを持つかもしれません（先行研究の読みこみ→テーマ決め→言語調査票の準備→聞き出し調査）。しかし、実際には、「聞き出し」にも課題発見型の側面があります。また、話者の自発的な語りが中心となる「テキスト（話し言葉を中心とした自然な言語活動のデータ）の蒐集」という手法があり、こちらはより課題発見型の側面が強くなります。その他、「現地の人々との日常的なやりとり」から探求すべき課題が見つかる場合もあることを自身のエピソードを交え言及しました。

歴史学からは守田がオスマン帝国時代のイスタンブルの都市社会史、特にマハッレ（街区）についての自身の研究を紹介しました。守田は現地の文書館でデジタル化された法廷台帳を通時的に閲覧・研究してきました。マハッレごとに実施された移住者の調査記録からムスリムのマハッレのなかに、非ムスリムのマハッレが存在している事例を発見しました。また、そうした入れ子構造のマハッレが存在する地区には、ムスリム女性と非ムスリム女性が共用する公衆浴場（ハマム）があり、宗教別に入浴曜日が設定されていることがわかり、史料同士のつながりを見つけました。現地に滞在中、守田は女子学生寮に寄宿していたことがあり、非ムスリムなのは守田のみで、他の学生とは別の階に部屋を用意され他の階に立ち入ることは禁止されたという、宗教により生活空間を区切られる自身の体験についても紹介しました。

人類学からは吉田が、ケニアの聾学校で目の当たりにした「聾児のダンス」が、その後の研究の根幹となったという、「課題発見型」フィールドワークについて紹介しました。吉田は語学が苦手だったことが、聾児たちのダンスを含む身体相互行為に着目する研究へと結びついたとして、「その人でないとできない」フィールドワークの独自性を強調しました。また、「複数の聾児がおどるときのタイミングが合っている」という事象を検討するための、ELAN（動画注釈アプリ）を用いた分析をめぐる葛藤にも言及しました。人々と自分との間にテクノロジーを幾重にも挟むことで、当の聾児たちだけでなく調査者としての自身のリアリティも見失う（俯瞰的になりすぎる）ことに違和感を覚えてしまうと述べました。

各分野のフィールドワーク紹介後の談議では主に次のテーマが話題になりました。（A）なぜ（わざわざ）フィールドに行くのか、（B）現地での生活、現地の人々（またはサル）とのつきあい方についてです。

（A）では、フィールドワークの手法が自身の研究テーマに適しているというだけではなく、現地で人またはサルをみたい、交流したいという動機も登壇者間で共通して持っていることがわかりました。（B）では、現地での人やサルとのやりとりや関係についてそれぞれが言及しました。分野に関わらず、「フィールドワーク」を行うと研究だけでなく、現地で生活も行っていかなければなりません。研究テーマとは直接は関わらない、研究対象のまわりのできごとに巻きこまれていくなかで、調査者は身体的な経験を積むことになります（例. 洗濯のしかた、現地での日差しのまぶしさや風の強さ、冠婚葬祭時の振る舞い方、サルの山の歩き方）。オンラインでの聞き取り調査やビデオ画像解析は、研究データを得る上ではすぐれた手法であり無駄も少ないですが、それらのみでは周辺の状況の把握または実感が抜け落ちてしまうこともあるかもしれません。現地での生活における研究者の生の経験は、その研究テーマにおいてどの点に特に着目するかに深く関わるのみならず、思いがけずその後の分析や考察とつながり得るという点でも重要になってくるのではないでしょうか。

異分野間での協働については、「専門外だが興味があることを発信する際に相談できる場の構築」や「データの取得方法や史料の取り扱い方法の共有」など今後の課題が浮きぼりになりました。本ラウンジ中にこれらの点について議論する時間は十分にとれませんでしたが、今後も異分野間で持続的に交流を続けていくなかで、悩みを共有し解決できる場を徐々に構築していけたらと考えています（談議内容詳細は、「3.3 談議内容のまとめ」を参照してください）。

３．開催内容の詳細

3.1 企画趣旨

本企画は、四つの分野（霊長類学、言語学、歴史学、人類学）の研究者が自分のフィールドワークについて紹介後、フィールドワークとは何かを談議し、分野間の相互理解をすすめ、異分野協働の足掛かりをつくることを目的としました。

フィールドワークは特定の研究分野に限ったものではありません。上述四分野のいずれも、フィールドワークにより得られた知見を研究のよりどころとしています。人類学、言語学、歴史学は、＜人間＞を対象とした学問です。そして、霊長類学も人間社会の起原について理解を深めることを一つの目的としており、サルだけでなく＜人間＞も研究対象に含まれます。この四分野は互いに深い関連がありますが、分野ごとに、目指しているところは異なり、それにともない自ずと「フィールドワーク」と称する調査の内実も異なります。

四分野のフィールドワークの手法に関し、一般的に次のような思い込みがあるのではな

いでしょうか。

〜霊長類学や人類学は行動観察／参与観察ベースで、言語学や歴史学はテキストベースで研究を進める分野である。また、問いの立て方として、霊長類学や言語学は取得するデータや問いがあらかじめ決まっている「仮説検証型」が多いのに対し、歴史学や人類学では、調査を進めるなかで徐々に問いが定まっていく「課題発見型」の傾向が強い。歴史学では入手できる史料のなかから、人類学では現地の人々と共に生活するなかから課題を発見していく分野である。〜

私たちは、異分野の方法論について上述のようなイメージを抱くものの基本的な部分を含め知らないことが多く、協働の可能性を探る十分な判断材料をもちあわせていません。この四分野でそれぞれのフィールドワークの手法をまずは知り、共有することは、分野を越えて協働し、＜人間＞について深く理解する上での一助となるでしょう。同時に、一人の研究者による異分野融合の研究も可能となるかもしれません。例えば、言語学者による人間の言語の文法研究には、霊長類学者によるサルの音声研究がヒントになるかもしれませんし、その逆もあり得ます。歴史学者の史料分析の手法と人類学者の参与観察法が、双方共に必要となる場面もあるかもしれません。

こうした背景のもと、本企画では、まず四分野の研究者 6 名が各自のフィールドワークについて報告し、報告後の談議は異分野協働の可能性に関するアイデアの創出やこれまでの調査で意識していなかった現象・手法などに目をむける機会としました。本企画は、発表者／参加者が研究を進めるなかで行き詰まった際に、他分野の研究者と相互に相談できるようになるための基盤作りを目指しました。

3.2 発表要旨

3.2.1） 霊長類学のフィールドワーク紹介

積雪地のニホンザルのアカンボウはどのように冬を越すのだろうか？

（谷口晴香）

発表要旨：

「積雪地のニホンザルのアカンボウはどのように冬を越すのだろうか？」。研究を始めたばかりのころ、そんな素朴な疑問を抱き、秋から春にかけて青森県下北半島で野生ニホンザルの調査をおこなうことにしました。まず、データを取得する前に、対象群（A87 群）のサルの顔を覚えることから始まりました。その後、観察対象のアカンボウのあとをついて歩き、なにを食べているのか、誰と共に過ごしているのかを調べました。じつをいうと、調査開始前は、雪のなかでアカンボウは母親にべったりとくっつき、ときおりなにかを食べるていどだろうと考えていましたが、そうでもありませんでした。「現場では、想像よりもおもしろ

いことがおきているなぁ」と、感じる瞬間が好きで、今でもフィールドワークを続けているように思います。今後、人間を対象とした研究もしたいのですが、きっとサルのようにうしろをついて歩いたり、取得したデータを無邪気に公表したりすることには倫理的な問題が伴うでしょう。この点については談議の場で十分な議論はできませんでしたが、このラウンジで得たネットワークを活用し、また皆さまにお尋ねできたらうれしいです。

3.2.2） 霊長類学のフィールドワーク紹介

ニホンザルの声のやりとりを野外で調査する

（杉浦秀樹）

発表要旨：

ニホンザルは「クー」という澄んだ声を出します。それを聞いた別の個体は「クー」という声を続けて出すことがあります。これは前の声に対する「返事」なのでしょうか？それとも、たまたま、2 頭のサルが続けて声を出しているだけなのでしょうか？こんなことを考えながら、野生ニホンザルを対象に、野外調査を行ってきました。ニホンザルは室内に 1 頭で飼育されているもの、野外の放飼場に群れで飼育されているもの、野生状態で暮らしているもので、発声頻度は少しずつ異なっており、観察のしやすさも異なります。そして、それぞれの場所で、使える研究方法も異なります。霊長類の音声を野外で調査することの利点や意味について本報告で指摘しました。また「研究上の利点」ということだけでは言い尽くせない魅力が、野生ニホンザルの調査にはあり、こういったことも野外調査の原動力になっているようにも感じます。この点は談議の場で議論しました（談議内容詳細は、「3.3 談議内容のまとめ」を参照してください）。

3.2.3） 言語学のフィールドワーク紹介

彼らはどうやってその母音を発音しているのか：沖縄県宮古郡多良間村での器械音声学的調査

（青井隼人）

発表要旨：

初めて沖縄県宮古郡多良間村に言語調査で訪れてから 13 年が経ちました。調査を開始した当初の私の関心は、当地の第 6 の母音の音声詳細でした。多良間村を含む宮古諸島の言語には、現代標準日本語の 5 母音（あ・い・う・え・お）に加え、もう 1 つ母音があります。この母音は、「い」と「う」の中間的な音色を持ちながら、[s] [z] のような摩擦ノイズを伴って発音されることがあり、一体どのように発音されているのかが長らく謎に包まれていました。このトークでは、フィールドで発音を客観的に調べる手段にはどのようなものがある

のか、それらの結果からこの「第 6 の母音」がどのように発音されていると推測できるのか、をお話ししました。

3.2.4） 言語学のフィールドワーク紹介
とりあえず行ってから考える：ザンジバルでのスワヒリ語の方言調査

（古本真）

発表要旨：

私は、タンザニアのザンジバルという島嶼地域をフィールドとして、スワヒリ語の方言に分類される言語の調査をしています。言語学者の多くは、集めるデータや検証する問いを予め決めて、フィールドに向かうのかもしれません。しかし、私自身の経験を振り返ってみると、解決すべき課題というのは、フィールドに行ってからみつかることのほうが多かったような気がします。このトークでは、予期せず出会った言い方や表現のなかに人にいいたくなるような言語学的発見があるということを紹介しながら、言語学者が他分野の研究者に期待することや相談したいこと、また言語学者がほかの分野の研究に貢献できる可能性についてお話ししました。

3.2.5） 歴史学のフィールドワーク紹介
イスタンブルで史料の海にとびこむ

（守田まどか）

発表要旨：

イスタンブルは、今日、トルコ共和国最大の都市です。ここにはかつてオスマン帝国の都が置かれ、数世紀にわたってイスラーム教徒やキリスト教徒、ユダヤ教徒から成る多様な住民が共存していました。オスマン帝都イスタンブルで、さまざまな宗教を信仰する人々はどのようにつながり合いながら暮らしていたのだろうか？それを知りたいと学部生の頃から思いつづけ、現在に至っています。私がフィールド（＝イスタンブル）に行く目的は、この疑問を解く手がかりとなる史料を収集するためです。はじめて現地に長期滞在した十数年前から、ある史料群を通時的に調査しています。そこから何が見えてくるのかわからない、もしかしたら何も見えてこないかもしれないのですが、史料の山に向き合うとき、とてもわくわくします。現地での生活は、基本的には文書館や図書館にこもって、ひたすら文書史料と格闘する日々ですが、刻一刻と変化する現在のイスタンブルの様子を肌で感じたり、日常生活で現地の人々と関わったりするなかで、数百年前のイスタンブルとそこに生きた人々について史料をより立体的に読み解くヒントが得られることもあります。本報告では、史料調査の詳細だけなく、現地で生活するなかでの私自身の体験についても紹介しました。

3.2.6） 人類学のフィールドワーク紹介
ケニアの聾者／聴者との民族誌的フィールドワーク〈私の場合〉

（吉田優貴）

発表要旨：

文化人類学に出会ってから 30 年近く経ちました。途中、「私は人類学をしていると言えるのだろうか？」と思うこともしばしばあった私が、これまでの調査研究について具体的に話しました。本ラウンジでの主な話題は、(1) なぜわざわざ「私の場合」と言うのか？、(2) 私にとって「なぜケニアでフィールドワークしたのか？」という問いが無意味なのはどういうことか？、(3) 動画注釈アプリ ELAN による分析熱が下がったワケは？、(4) 助けてください！ケニア国立公文書館で複写した貴重な紙資料が未整理のまま紙クズになりそうです！の 4 つです。ケニアの聾者／聴者の中で暮らしながら、彼らの相互行為に着目して調査を行ってきましたが、ここ数年では、「主観」を外さずにどう研究していくかというのを課題の一つとしています。それを（1）と（2）で話しました。(3）と（4）については、今後他分野の方にご意見をいただき、自分がこれからできることは何かを発見したいです。

3.3 談議内容のまとめ

＜調査方法の「限界」と乗りこえ方＞

- （参加者）同じフィールドワークでも分野や研究内容により方法論が様々で、大変興味深い企画でした。杉浦さんのご発表で、研究対象をどこで見るかにより、調査の「限界」を感じることがあるとのことでしたが、他の発表者の皆様にも同じようなご経験があるか、またその場合どのように乗り越えたり、発想を転換したか、教えていただけたら幸いです。
  - → （霊長類学・谷口）もともとはサルの下顎の研究をしていましたが、例えば、「サルのアカンボウは誰と共に食べているか」ということは、骨には残りません。当時、骨の研究のみでは限界を感じ、野外研究を行うことにしました。
  - → （霊長類学・杉浦）発表でも触れたように、放飼場での音声調査に限界を感じたため野外に変更した背景があります。しかし、「できないから次のフィールドを選んだ」みたいにきこえてしまいますが、実際にはそんなにきれいではなく、私は野外で調査がしたかったです。野外でやれることを探しながら研究をしたという側面もあるのかもしれません。
- （歴史学・守田）例えば、仮に、「法廷台帳を用いてイスタンブルのこの時代を研究したい」となると、その時代の法廷台帳を何冊か選び、サンプル調査的にやる方法もあるかもしれません。しかし、私は、自分のなかで確固とした調査方法はなかったのですが、史料をできるだけ多くみてみたいというところから始まりました。そして実際、そのことが新たな問題設定や発見につながったように感じています。

＜なぜわざわざフィールドへ行くのか＞

- **（フィールドにいかなくてもいいような研究であっても）わざわざフィールドに行くのはなぜか？**
  - → （言語学・青井）ラボで実験する研究者もいます。私の研究の場合も、話者の方を大学に呼び、あのような原始的な方法（パラトグラフィー調査）ではなく、最先端の設備で調査できたかもしれません。しかし、私はそこに違和感や抵抗を覚えます。個人としては感覚的にやりたくないと思ってしまうのは、フィールドに行くことに、漠然とした楽しさや魅力を感じているのかもしれません。
  - → （歴史学・守田）現地に赴いても史料の現物に触れることはできず、デジタル化された史料を文書館のパソコンから閲覧していますが、仮に日本にいてデジタル化された史料をみられるようになったら現地に行かなくてもよいのかといえば、私はちがうと思います。フィールドに長く滞在し、そこで生活した経験があるということが、実際にどのように研究に役立っているのかはわかりませんが、私にとっては少なくとも重要だと感じています。それは、かならずしも自分の研究テーマに関係するからというような理由だけではなく、現地の人と関わることが好きということもあるのかもしれません。私が現地にいた際に、例えば、日本でよくあるような単身者用のアパートは少なく、他人とアパートを共有することが一般的でした。そういう風に現地の人と生活したり、研究紹介でも少しふれましたが学生寮に住んでいたことがあったりしたことは、直接研究に役立ったとは思わないのですが、それが楽しかったというのはまずはあります。
  - → （人類学・吉田）私も含めてですがデータをみたいというわけではく、人やサルをみたい、関わりたい、おそらくそういうところに行きつくのではないでしょうか（後日補足：「データ」は人やサルを知るための道具であって、目的ではないという意味です）。

＜オンライン調査について＞

- （参加者）オンライン会議システムを使用した聞き取り調査を行っているフィールドワーカーの方はすでにいらっしゃるのでしょうか。
  - → （言語学・古本）まず前提として、その現地の方がオンライン会議のできる環境にあるかどうかというのがあり、それが解決された上でのはなしになると思います。対面調査とオンライン調査には、（イベントや会議を対面でやるかオンラインでやるかと同様に）違いがあると思いますが、その違いは言語化しにくいです。私はオンラインの調査は行ったことがないですが、オンライン調査を実施している方はいます。自分自身がやりたいかというとそうでもありません。それは、なぜかということを考えた際に、私が知りたいのはだれかが 1 人が話す場面ではなく、その言

語コミュニティの人たちが話すこと、あるいは、その集まりが共有している言語の知識が知りたいのだなと感じます。その場合、私の知りたいことはオンラインでは、完結しないのではないかと考えています。

→ （人類学・吉田）コロナ禍のためオンライン調査を実施したことがあります。オンラインでは制限ばかりあるかというと、そうでもありません。20 年来のつきあいがある聾学校の聴者の校長先生と久しぶりにオンラインでやりとりできましたが、オンライン上では、これまで不思議と尋ねてこなかった基本的な情報について腰をおちつけて尋ねることができました。現地にいると生活と調査の同時進行であわただしく過ごしていたのだと思います。しかし、やはりオンライン調査には限界もあり、例えば手話のような身体行為という 3 次元の世界での出来事を 2 次元の画面越しでとなると難しいこともあるのではないかと思います。

→ （言語学・青井）オンラインでは得られる情報が少なくなるため、顔から上の情報しかなくなってしまうのかもしれません。逆にそのことで、目の前の調査に集中できるという利点もあるのかもしれません。トピックさえ選べば、オンラインのほうが効率的・効果的にできることもあるのかなと思います。

＜現地の方とのコミュニケーションをとる際になにか大事にしていることはあるか＞

- （参加者）フィールドワークの際に現地の方にどういう研究をしているのかなどを説明することも含めて、現地の方（人以外の調査でも現地に在住の方）とコミュニケーションをとる際に、何か大事にされていること等はありますか。

→ （人類学・吉田）フィールドワークは、調査だけではありません。まず生活があり、ちゃんとご飯食べて、ちゃんと寝ることもします。そのうえで調査します。私は現地の方から洗濯の仕方も含め、そこでの生き方を教えてもらいました。そこから始めることで些細なことでもどんどん教えてくれるようになります。私たちが普段の生活で言語化していることはごくわずかなことで、言語化する以前に生の経験があります。調査の場所はちがうけれども、直接行くことでそこで生きるということがまずあり、それはベースとしてみなさんと共有できるのではないでしょうか。「コミュニケーションをとるうえでなにか大事にしていること」というよりは、「コミュニケーションをとること自体を大事にする」という、そういう側面があるのではないかと思います。

→ （言語学・古本）調査地で生活する時間のほうが、いわゆる調査らしい調査をしている時間よりもずっと長く、その時間をいかに過ごすか、あるいは私の場合は、その時間も現地の人といるため、その時間をいかに過ごすか、みたいなところが重要です。そのときに、どのようにコミュニケーションをとるか、できるだけ普通に話をしたりとか、あるいは、ザンジバルはとてもあいさつが大事なので、きちんとあいさつをしたりだとか、そういうことを通じ、実はそれ自体であたらしい発見があ

ります。私は言語の調査なので、しゃべるだけで気づきがあったり、あるいはそれこそ以前にあったことは、水汲み場でおしゃべりしているおばちゃんたちの話がおもしろく、もう一回話をしてよと頼むこともありました。コミュニケーションがどうかというか、私はなに者であるかを紹介するし、彼らがなに者であるかを知るということに時間を使っているように感じました。そのため、「コミュニケーションをとるということ」、それだけで特別なことはしておらず、日本にいるときと変わらないかと思います。そういうコミュニケーションを現地でもとっています。

→（言語学・青井）そうですよね。私も集落をうろうろと出歩き、例えば、沖縄では「ゆんたく」というのがあり、木陰でおしゃべりしているおばあが 2 人いたりして、そこにちょっと寄っていき話を聞いてみたりといった感じで、人とコミュニケーションをとろうとしています。

→ （霊長類学・谷口）観察しているサルがときおり農地にでるため、サルが畑にでている際にサルの観察をしていると、地元の方から「おや？」と思われます。農地にサルがでた際はロケット花火などでサルの追い払いをします。そして、「観察しているサルがすみません」というようなやりとりを地元の方とします。やはり、畑の野菜などをサルが食べてしまうため、「サルを殺してほしい、減らしてほしい」と現地の方から言われます。サルの観察をしていると、現地の方との関りが難しいですが、「畑にでたら追い払いしますね」というようなコミュニケーションはとても大事にしています。

→ （霊長類学・杉浦）屋久島の調査地では、地元の方との関わらなくてもすんでしまいます。しかし、地元の方に理解してもらうことは重要です。もうひとつは、サルそのものが対象であると考えると、実験室や放飼場と比較し、野外でサルを追いかけていると、自分が対象としているデータ部分よりかなり広いところを一緒に関わることが非常にあります。そのため、野外では自分の対象としているもの以外にもいろんなことが周りでおこります。

＜現地のことばを話すことについて＞

人と人のコミュニケーション

- （言語学・古本）コミュニケーションをとるうえで大事なことは、現地の言語を話すことです。言語学の調査では、調査対象の言語を使用しない研究者もいます。そのため、調査としては調査対象の言語を習得することは必須ではないのですが、実際に現地にいるためにはやはり現地の言葉で話すと信頼を獲得しやすいです。

→ （言語学・青井）現地の言葉でコミュニケーションする、または学ぶ姿勢を忘れないということは大事ですね。「調査者」として信頼してもらえます。

→ （人類学・吉田）話すときは、たどたどしくてもよいのではないでしょうか。ある知り合いの長生きをされたお父様の葬儀に参列した際、突然参列者の前で何でも

いいから挨拶してくれと依頼されました。スワヒリ語やローカルな言語を織り交ぜたメモを急いで用意し、たどたどしく話したら、みんなクスクス笑いながら喜んでくれたという経験をしました。一方で、アメリカ人のボランティアの方で、「わたしたちが助けてやってる」という横柄な態度の方がいました。ケニアは公用語が英語なので、その人たちは言葉こそ通じていましたが、現地の方とのあいだに距離感があるように思えました。

→ （言語学・青井）ただ、調査をするということであっても、現地で生活させてもらうというのが大前提としてあるので、「調査」ということだけに集中しすぎると、不信感や不快感を抱かれてしまう危険性があるように思います。なるべく対等な関係になる、横柄な態度をとらない、というように普段からの人とのコミュニケーションで大事にしていることと、大きく変わらない気がします。

- （霊長類学・谷口）あの独特の発音（第 6 の母音）を青井さん自身も発音できるのですか。その場合、発音できるようになると調査しやすくなった印象はありますか。

  → （言語学・青井）現地の方に合格はもらいました。発音できるということが「調査者」としての信頼をえるきっかけになったのではないかなと思います。

- （霊長類学・谷口）守田さんは史料をよめるようになったら、現地の人に受け入れてもらえたというような感覚はありましたか。

  → （歴史学・守田）あまりそういうことを感じたことはありません。同じようにオスマン帝国について研究している人以外の方と話している際は、意識的にそうしているわけではないのですが、普通の世間話をしています。むしろ、いろんな人が身の上話をしてくれるのが楽しいです。イスタンブルの人たちがそうなのかはわからないのですが、冗談好きな人が多い印象があります。

  → （霊長類学・谷口）史料のなかに「冗談を言い合うようなやりとり」がでてくることはないのですか。

  → （歴史学・守田）現時点では思いつきません。

- （霊長類学・足立）歴史学では史料をみにいく、それがフィールドワークです。その経験が新鮮でした。そのなかで生活し、現地の方と話していかないといけないというところが、じつはサルをみにいく場合も、人をみに行く場合も普段の生活も含め全部フィールドワークと考えると、それとの連続であるように感じました。

サルと人のコミュニケーション

- （霊長類学・谷口）杉浦さんは、「クーコール」をだしたらサルから返答をもらえることはありますか。私はサルにまったく返事してもらえないのですが。

  → （霊長類学・杉浦）返事があることもあります。それはなきそうなときになくのが大事です。なきそうにないときに「クーコール」をだしても、無視されます。サルがコンタクトをとりそうなときにぽっと「クーコール」をだす、また、他のサルが

ないたように誤解させる位置からなくと、返事してくれることはあります。

- （霊長類学・谷口）杉浦さんは、自分が「クーコール」をないて、サルからの返事があった場合、サルから受け入れられたように感じますか。
  → （霊長類学・杉浦）私はそうは思っていません。他のサルがないたようにごまかしてないているので、受け入れられてはいないのではないでしょうか。

＜ニホンザルのクーコールについて＞

サルは誰にむけてないているのか

- （言語学・青井）ニホンザルの「クーコール」をスピーカーや声真似でだす際に、特定の個体にむけてというのは可能なのですか。それとも集団にむけてということになるのでしょうか。
  → （霊長類学・杉浦）特定の個体にむけて行いたかったのですが、放飼場は誰が答えるかわかりませんでした。野外では個体にむけてもできるのですが、ターゲットとは別のサルが答えてしまい、「せっかく、再生したのに・・・」ということは多々あります。
- （言語学・青井）野生のサルの場合は、特定の個体に呼びかけようとしているのでしょうか、それとも集団によびかけているのでしょうか。しかし、そもそも区別はできるのでしょうか。
  → （霊長類学・杉浦）それは私にもわかりません。

ニホンザルの「クーコール」の意味について

- （言語学・青井）「クーコール」をどのような目的でないているのですか。人間のコミュニケーションを考える際は、特定の相手にむけて発話する。一対多の講演のような場面であっても、「多」という集団に対して話すため「誰でもよいから答えてほしい」というような場面は人間ではそんなに多くはないのではないでしょうか。サルの場合、呼びかけて、応えてもらった後は、なにをしようとしているのですか。
  → （霊長類学・杉浦）じつはよくわかりません。例えば、自分から仲間がみえないときになきます。それはともかく誰か応えてほしいからだと思います。ただし、近距離でなくこともあります。なにもしないこともあるし、近づくきっかけになることもあり、いろいろあります。人間の場合は非常に細かく状況を限定しています。サルは手持ちのものが少ないため、広い状況に対応させようとすると意味も広くなってしまいます。そのあたりが、サルに人間の言語の発想をもちこむと難しいのではないかと感じます。
  → （言語学・青井）「クーコール」の説明の際に、「平静な状態のとき」の音声を対象にすると言っていましたが、それはいろいろな状況に該当するのではないでしょうか。警戒の場面のときにだす特定のなきごえというのはきっとちがうのだろう

なと思いました。

→ （霊長類学・杉浦）人間の言語と近いかたちで研究がすすんでいるのはサルの警戒音で、状況がわりと狭いです。警戒音は天敵がいたときにだす音声でわかりやすいですが、そうでない音声も多いです。

→ （言語学・青井）人間を対象とするのと、動物を対象にするのでは、困難さが変わってきそうですね。人間を対象とする場合、話者の方が「この単語とこの単語はよく似ているけど、こういう使い分けがあるよ」と、教えてくれたりするのですが、サルと直接コミュニケーションをとれないとなると、そのあとにどんな行動をするか、サルでは観察可能な行動に落としこみ、解釈するという作業をするのですね。

＜他分野とのコラボについて＞

- （言語学・古本）テキスト蒐集を通じて、失われた昔の風習を教えてもらうことがあります。論文化をどのように進めていけばよいか悩んでいます。また、他の分野の研究でも、断片的であっても言語データを残しておいてもらえると、のちの言語研究への助けになるかもしれません。
  → （霊長類学・谷口）他分野と共同研究する際に、どのようなデータがあれば、研究に使ってもらえるのかがわかりません。具体的に教えてもらえたらうれしいです。
- （霊長類学・杉浦）屋久島の西部林道周辺では昔の集落の痕跡が残っています。おもしろいと思っていますがそこで止まっています。発信したいが、一方で専門的なところまではいけそうにありません。専門外の分野に興味をもった際にどのようにすればよいのでしょうか。

＜先行研究との付き合い方について＞

- （言語学・古本）吉田さんの発表にも言及がありましたが、先行研究とのつきあいかたはみなさんどうしているのでしょうか。私の場合は、先行研究に寄りすぎてしまうとうまくいかなくなることもありました。私は先行研究からはいったん距離をおいて考えてから付き合うことにしています。

４．参加者からの質問・コメントへの回答

談議中にすべての質問に回答できませんでした。そのため、簡単ではありますが、本報告書にていただいた質問で未回答のものに関し下記のとおり回答いたします。

＜霊長類学への質問・コメント＞

- （参加者）サルの母から子への発声と、ヒトの母から子への発声に類似はありますか。また、杉浦先生の発表のなかにあった返事の速さに、仲間の集団サイズの大きさはどの

程度影響しますか。

→ （霊長類学・杉浦）親子の類似はそこまで調べきれていません。ヒト以外の霊長類での「音声学習」ということになるでしょうか。これは、非常に関心の高い課題ですが、まだ分からないことが多いと思います。「返事の速さ」と「仲間の集団サイズの大きさ」の関係についても調べていません。1 つの群れしか調査していないので。応える個体が多くなると、速くなりそう、という予想は立ちそうです。

- （歴史学・守田）谷口さんは日記をつけていましたが、研究にどのように生かしているのですか。

→ （霊長類学・谷口）日記は研究室の先輩のすすめでつけていました。趣味のようなもので、研究とは直接関係ありません。しかし、データ分析する際に日記を見返すことで、当時の印象が分析や考察の役に立つこともありました。

- （参加者）サルを追跡し観察する際、サルから敵視されて攻撃されたりすることなどはないのでしょうか。

→ （霊長類学・谷口）サルから攻撃されることはなかったのですが、畑にでたサルを追い払う際はサルから威嚇されることはありました。

- （参加者）追跡中の飲食はどうされていたのでしょうか。サルに取られてはいけないでしょうから、その際はサルたちから離れるのでしょうか。

→ （霊長類学・谷口）サルの観察中にも飲食はしていました。かばんから食物をとりだした際に、近づいてくるなど、人間の食物に敏感なサルが近くにいる場合は、そのサルから隠れて食べます。私が観察していたサルの群れのほとんどのサル達は人間の食物は、「食物」という認識がないのか目の前で食べていても特に反応しませんでした。

- （参加者）例えば、現在、日本でのサルの山での食料不足問題で山から人間環境への進出における悪影響問題から考えると、サルの暮らす山のフィールド以外への進出が、現在のサルの親子関係において何か変化していることはありませんか。その人間環境域の進出における食（果物・野菜等など）への変化が、今後どう親子関係に影響が考えられますか。

→ （霊長類学・谷口）わかりません。今後、考えていきたいです。

＜言語学への質問・コメント＞

- （霊長類学・杉浦）ɨ の地理的分布は、どうなっているでしょうか。そこから分かることはなんでしょうか。

→ （言語学・青井）/ɨ/（第 6 の母音）は、与那国島を除く先島諸島に広く分布しています。この母音は、現代共通日本語の /i/ におおむね対応しており、*i から発達してきた母音だということがわかっています。したがって、/ɨ/ を持つ（与那国島を除く）先島諸島の言語は、*i ＞ ɨ という共通の変化を辿っていることがわかりま

す。ただし、/ɨ/ には方言差があることが知られており、その方言差がなぜ生じたのかはよくわかっていません。その方言差を調べていくことで、具体的にどのようなプロセスで *i から変化してきたのか、その背後にどのようなメカニズムがあったのか、などが明らかになる可能性があります。

- （参加者）方言発音はどの様な要因で生まれたのですか。
  → （言語学・青井）（現代日本語共通語には見られないような）方言に特有の発音は、方言にのみ発音の変化が生じたか、あるいは共通語に起こった変化が方言では起こらなかった（つまり変化しなかった）か、のいずれかで説明できることが多いだろうと思います。たとえば今回取り上げた /ɨ/ は、共通語には起こらなかった変化が南琉球で起こった結果ということができます。
- （人類学・吉田）文字に書き起こせない事象をどう分析しますか。テキスト化しづらい身体表現（声など）についてはどう分析しているのですか。
  → （言語学・古本）ジェスチャーや、言語音らしくない発声については、フィールド言語学分野では分析の対象に含めないということが実情だと思います。ただ、コミュニケーションということを考えると、一般に言語学の分析の対象とされるものとそうでないものの間に、明確な差はない気もします。吉田さんのような方とコラボレーションをすることで、この課題に、新たな道が開けるのではと思っています。
  → （人類学・吉田）ELAN の使い方ひとつをとっても、古本さんと私では異なる使い方をしているようですし、それぞれの調査研究に合う形でどのように分析道具を使うかということについて一緒に考えたいところです。
- （参加者）ロシア語の他に、スワヒリ語は、とても難しい言語学の中の一つとされていますが、どういうところが難しい要因だと思いますか。
  → （言語学・古本）おそらく、どの言語がどの言語より難しいということははかれないと思います。人によっては、スワヒリ語は簡単なんていう人もいますが、やってみるととても難しいなと思っています。日本語や英語も同様に難しいです。ロシア語は勉強したことがないですが、きっと同様に難しいです。

＜歴史学への質問・コメント＞

- （参加者）史料収集する上での機材等を紹介してほしいです。
  → （歴史学・守田）すでにデジタル化されている史料は文書館のパソコンから申請し、デジタル化されていないものについては、自分のデジタルカメラで撮影しています。

＜人類学への質問・コメント＞

- （参加者）ニホンザルの野外調査でも、Go Pro を頭につけて、延々と画像を撮っている人を見かけるようになりました。それが要求されるようになった、ということもありそ

うですが、「そこまで必要なのかな」とは思います。直接見て、ノートに書いてもいいのでは。ただ、音声研究ではずいぶん前から、録音－PC での分析は当然という雰囲気でした。そこまで、研究が進んでしまっている、というのが 1 つの答えになるでしょうか。

→ （人類学・吉田）まさにそれです。20 年前、ビデオカメラを用いながら「これは意味のあることなのか」と思っていました。ELAN に出会う前から、カメラという機材を間に挟んだフィールドワークにときどき疑問を持ちながらフィールドワークをしていたように思います。ただ、ノートに書くにはやはり限界があります。身体の動きのどこに焦点を置いて書けばよいかわからないし、ト書きにしようとしたら間に合わない。かといって、撮影すると今度は焦点が定まりすぎるし、そのときどうしてそこに焦点を置いたか、時間が経つと忘れることも出てきてしまいます。さらに現地で撮影した動画を分析するとなると、画面の中で展開している出来事と自分が生で経験した出来事との間で迷走が始まります。すぐには結論が出ませんし、この先も出ないかもしれませんが、おそらく、併用の仕方というのが肝になるのではないかと思います。一時期、映像方法論関係の共同研究に参加するなどして、「言語で記述できないことを映像で表現できるのか」とか「そもそも映像を用いた研究とは」みたいなことを考えたりもしました。今は、何周も回って、「やはり言葉で表現していきたい」と思うようになりました。

- （参加者）ビデオ記録をみるだけでなく、現地で調査をする意味とは、音楽でいう“ライブ”か“DVD・NETFRIX”の違いなのではないでしょうか。

→ （人類学・吉田）部分的にはそうだと思います。ただ、ライブか DVD かというだけではありません。そのたとえは、「観客目線」だからです。確かに観客がいることで演者の振る舞いがある程度変わることもあるかもしれません。ですが、例えば寄席で噺家が客の様子を舞台袖で見ながら、自分の出番が来て急に予定していたのとは別の噺に変更することはあっても、落語ではなくコントを始めるということはないでしょう。現地である意味とは、特に今回の登壇者に共通して言えることだと思いますが、それぞれの調査者と現地の人なりサルなりとの関わりがあって初めて成り立つ調査だということだと思います。このことは、調査や研究の一回性と再現性、データとの向き合い方など、深い議論になっていくと思っています。今回は単なる「現地（ライブ）大好きっ子ちゃん」の集まりではないことをもう少し具体的に明示できればよかったなと思っています。

5．謝辞

本企画は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センターフィールドネットの支援を受け開催しました。特に、本企画の採用後から研究会

実施にかけての種々の手続きや運営についてご対応いただきましたフィールドネット事務局の千葉淑子さん、フィールドネットの河合文さんに、あらためて感謝申し上げます。また、AA 研研究機関研究員の川添達朗さんには時計係をしていただきました。ありがとうございました。最後に、登壇者をはじめ多様な背景を持つ参加者の方々から、貴重な質問とコメントをいただきました。この場を借りて心より感謝を申し上げます。

本企画は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センターフィールドネット、科学研究費補助金基盤研究（S）「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」（研究代表者：河合香吏、課題番号：19H05591）、科学研究費補助金基盤研究（C）「ケニアの聾／聴者の相互行為態に関するヴィジュアル・メソッドを用いた民族誌的研究」（研究代表者：吉田優貴、課題番号：20K01189）の助成を受けたものです。ご支援いただきありがとうございました。

2023 年 1 月 9 日

2022 年度フィールドネット・ラウンジ企画

（資料）イベントポスター